

## 編 集 後 記

学院創立90周年の記念事業の一つとして2005年に『西南学院史紀要』の発行を企画した。その目的は、「紀要は西南学院史の調査・研究の成果を公表する場となり、学内外の百年史編纂に対する協力と理解を得る媒体としても大きな力を発揮する」ことを目指して、翌年、創刊号を発行した。

そして今日まで号を重ねて12号を数えるに至ったが、紀要発行が学内外の理解と協力を得て、間もなく発刊される『西南学院百年史』に多少なりとも寄与したことで、その役目を終えたのではないかと思っている。

最終号となった第12号で金丸委員長は、『西南学院史紀要』は、この号で一端終刊となるが、新たな形で再出発を目指してもらいたいという願いを込めて巻頭言をご執筆くださった。

また、学院が100周年という節目の年に戦争責任などに対して「平和宣言」を発表したが、そのことを「百年史」に執筆された伊原先生は、紀要にも同じ趣旨でより内容の深い原稿を寄せていただいた。

父親が西南学院の教員であったため、幼少時代に過ごした西新や百道に思い入れが深い村上先生は、「昔のことを知る人が少なくなった」ために書き記しておきたいと、「百道浜の記憶」というタイトルで思い出を綴られた。

伊佐先生は、ご自身が組合長としての経験と組合の歴史を物語る「組合報」から見た「教員組合の歩み」をお寄せいただいた。これまでに教員組合についてまとめた資料がなかっただけに貴重である。

また、資料センター事務室の松岡さんは、西南学院中学部の第1回卒業式のプログラムに「校歌」という項目がなかったことをきっかけに水町証言を検証する原稿を執筆されたが、今後の調査・研究に期待したい。

前田室長は、百年館の竣工までの経緯と学院史資料センターの開設をまとめてくださり、同センターは、「教育・研究活動に資する場、学生・生徒等が、同窓生や地域の方々など様々な立場や世代の方々々と自由で活発な交わりを通じて人間力を高める」ような場でありたいと結ばれた。

この号で紀要を閉じることになるが、次の100年に向けて学院の歴史と伝統を受け継ぎ、学院史に関する研究会などを立ち上げることが望まれる。その成果を発表するための研究紀要的な性格の冊子誕生に期待したい。

最後に、ご多用中にもかかわらずご協力くださった執筆者の皆さまをはじめ、様々な形で紀要の発行にご協力をいただいた多くの方々々に感謝を申し上げ、終刊としたい。ありがとうございました。(世)